建暦・建保前半の藤原家隆の一面

――「内大臣家百首」・「内裏名所百首」を中心として――

名子喜久雄

藤原家隆は、定家に比した時、「明月記」にあたるような、直接的資料に欠けるために、その生活と心情のわかりにくい存在である。和歌作品に対する研究も、新古今集成立直後までと見合せると、順徳朝前期のころ（建暦・建保初年）の和歌に関しての解明の余地は少なからぬものがあると考える。

本稿は、この時期の和歌作品によって、家隆は、自己の不遇を強く人々に訴えていたこととその内容、さらには、その背景をなしていた、家隆の貴族社会の一人としての状況の解明を目的とするものである。主な和歌作品としては、建保三年の「内大臣家百首・内家名所百首」が、対象となる。ただし、本稿はこれらの和歌の一面を示したもので、表現等のことがらには、紙幅のかかわりもあり、あまり言及していないことを、あらかじめ申し述べておきたい。[1]

一

同様の研究が、これまでまったく行われなかったわけではない。松井静子氏は、精力的かつ継続的に家隆和歌の研究を行われているのだが、その中の「家隆と『憂き世』」[2]で氏は、「家隆の感じた憂き世とは何か」を、百首数などの定数歌の晴れの和歌行事の雑・述懐部から、家隆の年齢の推移に応じて、読みとることを試みられた。その結果として、松井氏は、「内大臣家百首」の五首

581 おもふことやまはふじのねとしをへてかしらのゆきぞふりまさりゆく

582 けふもうし昨日もつらしあすかがは身のいたづらに月日かぞへて

583 わかのうらやたつうはなみのあとをだにおきをふかめて見し人ぞなき

584 日の光やぶし分きけりいたづらに我身時雨のふる里の秋

585 たらちねの親のまもりもわかれにしうき世の関も出でがての身や

より、老いの嘆き（581）・和歌界での孤独（583）・「親を孝養する務めからも解放されてしまった」のに「出離」できぬ嘆き（585）[3]などを読みとられた。また、建永元(1206)年「卿相侍臣嫉妬歌合」との対比の上で「内大臣家百首」の五首を、「あまりに私情を織り込みすぎている」とも評されてもいる。

これらの詠には家隆の嘆きが露わな姿で表現されていることは氏の論ずる通りであろう。たしかに、氏も触れられたが、十二年前に、後鳥羽院の三度百首として初め企画された「千五百番歌合」において、それらの思いを感じさせるものとしては、巻軸の

500　うきながらあればぞあへる君が代にかずしらずとも身をばいとはじ

が指摘しうるに止まることに較べると、あまりの落差の大きさを感じざるをえまい。「千五百番歌合」の家隆詠には、久保田淳氏の評言[4]もあるが、それをも手がかりとして考え合せると、「内大臣家百首」のこれらの歌は、述懐題ということもあってか、実に様変りし、自己の嘆きを様々に訴えているのである。

二

ところが、このような家隆の思いが託された歌は、他の部立にも散見されるのである。

四季部においても

春　栽花

510　移し植うる齢は老いぬ八重桜知らぬ命の春ぞまれなる

夏　初郭公

518　今年なほあはれとぞ思ふ時鳥あればあふ世の老の初音は

冬　歳暮

550　むかふべき春の残りの末のかげ身にあらたまの年も少なしと、自己の老残を嘆き、

夏　故郷橘

523　故郷は五月もしのにいとまあれど花橘を訪ふ人もなし

秋　嶋月

532　心からまがきの島の松とだに都に告げよ塩がまの月

冬　水郷寒蘆

544　大井川入江のあしの霜がれに残るも寒き松の色かなと、自己の孤独を詠い、

秋　谷鹿

530　春日山谷がくれ行く鹿の音も春（はか）なき秋の身をや恨むる

冬　深夜霰

549　長き夜は霰乱れて降りにけり玉の緒とけて夢も結ばずと、苦しみを訴え、

秋　古寺紅葉

539　紅葉する雲の林も時雨るなり我ぞわび人たのむ影なし

のように、頼る存在のいないことなどを、手を変え品を変えつつ詠じているのである。

さらに、この流れは四季部に留まらない。神祇・釈教各五首の中にも注意せねばならぬ詠作がある。

神祇　賀茂

593　千早ふるそのかみ山の木棉だすきかけてたのみしほどは過ぎにき

春日

594　春の日にまだ霜がれの思ひ草思ふ心は神ぞ知るらん

住吉

595　むつまじき道をぞたどるすみよしの神もあはれとみづがきの松

釈教　弥勒

600　わび人の涙の雨もあらじかし笠置の山の法の朝日は

593では、賀茂の神に対して、自分が頼みをかけ続けた期待の外れたことを難じている。594・595では、それぞれ氏神である春日社、和歌の神である住吉神に、卑小な存在である自己の現状を訴えつつ恩寵を期待している。600では、笠置寺の本尊である弥勒仏の仏徳を讃歎する形にはなってはいるものの、「わび人」は家隆であろうから、屈折した形で家隆の悲しい思いの反映した作となっているのである。

三

話題を転じて、これまで論じて来た「内大臣家百首」で示された、「暗い思い」とでも称すべき家隆の心情は、何に基づくものかを考えたい。

理由としてまず考えられることは、この百首の主催者である道家に自己の穏やかならぬ現状を知ってもらうことであろうことは、容易に想像がつく。とはいえ、これでは、家隆の立っていた状況への配慮が少ないのではなかろうか。この時に、家隆は、道家に何の理由があって自分の嘆き・悲しみを知らしめようとしたかを考えたいのである。

結論的なことから先に述べれば、道家の家隆との関係は、久保田淳氏の示唆[5]があるが建保初年までは道家と定家の関係と比した時、異ったもの、言いかえれば、縁のうすいものであったと思われるのである。(これを家隆と九条家との関係と言い換えても良いかとも思われるが)

元久三(1206)年三月の良経の急逝の後、歌人たちはそれを悲しみ、和歌の贈答を行っている。家隆も定家との間に

2796　きのふまでかげとたのみし桜花一夜の夢の春の山風

定家

返し

2797　悲しさの昨日の夢に比ぶれば移ろふ花もけふの山風

の贈答を行い、更に「五六日ありて」十首ずつの贈答[6]を行ったことを知りうるのである。

しかし、その後、周知のこととは思われるが、定家と九条家との関わりには大きな変化はなく、浅からぬ関係が続くのではなかろうか。「三長記」同年四月十二日条では、定家が、前日笠置寺において貞慶を導師として、良経の追善供養を行ったことが定家の口から語られている。

一年後、定家は慈円と懐旧の贈答を交[7]し、そこに至った経緯はわからぬのであるが、「拾遺愚草」無常には、さらに、

承元四年三月七日左大将殿（道家）へ

2678　おくれじとしたひし月日うきながらけふもつれなくめぐり

あひつつ

返し

2678　かすみにしけふの月日をへだててもなほ俤の立ちぞはなれ

ぬ

と、道家との五年後の祥月命日の贈答が残されていて、定家の良経没後の道家への同情の念が時の流れに薄らぐことなく続い

ていることが知られるのである。

のみならず、「内大臣家百首」の巻頭歌でも、定家は

1101 うぐひすもまだ出でやらぬ春の雲今年とも言はず山風ぞふく　（早春）

と、「和漢朗詠集」春・鶯の[8]

鶯未出兮遺賢在谷

によって、九条家に摂関の座の廻り来ぬことを道家とともに嘆いているのである。また、同百首中「神祇五首」中の「伊勢」題でも、

1191 身を知れば祈るにはあらで頼み来し五十鈴河波あはれかけけり

と、二十年前、建久六(1195)年の良経の伊勢への公卿勅使としての下向の供をしたことを回想している。[9]良経への思いが薄らぐことのなかったことがうかがえよう。

目を転じ、記録類をたよりに、建保期に至るまでの道家家の文事をたどっても、定家の九条家における地位が、うかがえると考える。

主な文事を挙げるに止めるが、道家主催の文事は、承元二(1208)年六月四日（道家16歳）の「初度作文和歌会」に始まるようである。「明月記」によれば、この時のメンバーは、詩が、序者でもある菅原為長、講師が藤原孝範、その他に藤原親経・藤原長兼（和歌の読師もかねる）、主催者側として道家・教家が知られる。和歌は、講師として藤原宣房が知られるのみに止まる。定家自身の関与は、いまひとつわかりにくいのだが、このような詳しい情報がすぐさま耳に入ることを重視したい。

次いで、建暦二(1212)年七月二十三日「内大臣道家家詩歌合」に注意したい。久保田氏の興味深い、五月十一日の内裏詩歌合の影響かとの指摘があるが、その参加メンバーは、二十一名ほどと推測される。同じく、久保田氏の指摘では、その中に家隆も、隆祐も参加していないのである。[10]有家が参加していることを考え合せると不可思議な人撰とも思われる。加えて、その経緯にも注目すべきことがある。

「明月記」によって流れを追えば、七月十七日に、まず道家より「二十三日に作文和歌会がある」ことを示される。かつ、光家・為家の出詠も求められたらしく、定家は一応辞したが許されない。二十日には、歌題の撰定を行った後、雅経に示すべきことを具申する。当日は、文事の前に「御歌を賜りて見るに難なし」と道家の和歌を内見している。[11]道家家の文事における定家の地位は、この記事から想像すれば、決して軽々しいものではありえまい。

さらに、建保元(1213)年九月十三夜「道家家歌合」にも注意したい。小規模な行事ではあるが、参加者（知家・兼隆・光家・季忠）の中に、定家の子息（光家）や門弟（知家）が入っている。これらのことにも、定家の九条家内での位置が暗示されていよう。

とすると、良経没後も道家の成長とともに九条家の文事は行われていたが、それは、作文は、親経・長兼に代表される父・良経以来の儒臣たち、和歌は、俊成以来の御子左家の人々（それに清輔以来の六条家を加えることも可能か）により支えられ続けて来たことが推測できるのかもしれない。別の観点に立て

ば、これまでの行事は道家にとっては、いまだ習作ということだったとも言いえよう。それゆえ、九条家に親近する人々による行事の段落にあると考えられる。

かように推測すると、これらの一連の行事に重い地位を占める定家と参加の形跡のうかがえない家隆の間には、九条家に対しての親疎の違いがあったように思えてならない。

四

これまで、良経没後の定家と家隆の九条家に対しての立場の変化を考えて来たが、その原因の一つには、そもそもの家隆の立場・家系などに由来するものがあるのではないか。

事新しく説く事ではないが、家隆の父光隆は、後白河院に近い人物と考えられよう。また、光隆の姉妹を見ると、閑院流の公教室となり、後に白河院女御となる宗子を生んだ女性、大炊御門経宗室となり、頼実母となる女性に注意が行くのである。さらに、光隆弟定隆の女子は、従兄弟頼実の妻となり、後の土御門中宮陰明門院麗子を生んでいる。すなわち、閑院流や大炊御門流に近い家系であり、天皇で言えば、後白河法皇に近いと言うべきだが、その崩御の後は、頼実が卿二品兼子と結婚したこともあって、土御門系の人々たちと、言いえよう。

すでに有吉保氏の指摘[12]があるが、家隆の任官昇叙の因を「公卿補任」に探れば、そもそもの叙爵が「女御宗子給」なのである。また正治三(1201)年正月の、従四位下に叙せられた際と、元久二(1205)年正月に従四位上に昇った時には「皇后宮(麗子)[13]当年御給」と注記されている。

その他の昇任などで留意すべきは、父からの庇護であろう。安元二(1176)年正月の任侍従には「光隆卿辞治部卿任之」とある。文治元(1185)年十二月に越中守の職に就いた時にも、「兼侍従。止平親季任之。前治部卿光隆卿給」との記載がある。

このように見て行けば、家隆の拠って立つ人々がどのような人々かがわかるであろう。

しかし、これらの人々は、建暦・建保の頃には、家隆に庇護を加えうる状況にはないのである。

女御宗子は、後白河の寵愛の厚からぬ女性であったらしいが[14]、承安三(1173)年六月に二十七歳で出家している。寛喜三(1231)年まで生きるが、その出家後の人生は華やかなものであったとは考えにくいのである。

麗子も、承元三(1209)年三月、道家姉立子に東宮(順徳)御息所となられ、さらに、翌四(1210)年十一月土御門上皇の譲位を迎えることとなる。

父光隆は、建仁元(1201)年八月に、妻雅隆女も、建仁三(1203)年夏に没している。光隆没後の一族の中心人物とも見られる岳父で兄の雅隆も、建保元(1213)年九月に出家している。実に家隆を護り盛り立てるべき人々が、次から次へと消え去って行くのである。さらには、どれほどの援助を与えたかは、わからぬが従兄弟にあたる頼実も、建保四(1216)年正月に出家する。

建保初年に家隆の置かれた状況は、このように極めて厳しいものであった。

このような家隆のもとに、道家が九条家の伝統の雅事の正式な再開の報が告げられたのである。定家に比肩さるべき存在で

ある家隆への出詠要請は当然のことであろうが、おそらく、家隆はこの機を生かすことを思量したのではあるまいか。「六」に詳しいが、これまで、人に訴えかけても認められることのない思いを、順徳天皇の下でいずれ枢要の臣となるはずの道家に知ってもらおうとしても、何の不思議もないであろう。

そのような心情が、雑五首以外にも自己の思いを反映させる述懐的作品を読ませたと考えるものである。

五

これまで、「内大臣家百首」を検討して来たが、ほぼ同時平行的に行われた「内裏名所百首」には、ここまで述べたことがらは、どのように扱われたであろうか。

「内裏名所百首」は、後代、「正徹物語・下」で

初心の人哥を詠むべからず

と、評されたごとく、名所詠ゆえの本意の制約があり、さらに、各名所が各部立に配列されるという二重の制約のために、詠出しづらい組題とされている。その中で、家隆の、以下の諸作には、注目せざるをえないのである。

625 夏　伊香保沼
五月雨にいかほの沼のあやめ草けふの五日と誰か引くらん

655 冬　田蓑嶋
霜うづむたみのの島にすむたづ(みの)の名にはかくれぬ袖や冴ゆらん

657 有乳山
あらち山ちりかひくもり花と見る雪に老らく道やまどはむ

681 雑　吉野河
よしの川よしや世の中はやき瀬にたえねばこそはけふまでも経れ

684 還山
たのめてもまつてふ道にかへる山何ぞはありて人の行らん

689 吹飯浦
いたづらにをのがふけゐの浦なれて子を思ふたづのいふかひもなし

690 布引滝
干しあへぬわれぞわが世の袖にかる濡れて久しき布引の滝

692 玉河の里
多摩川にさらす手づくりさらに世をたのむ日かげのあはれすぎゆく

693 生浦
いたづらに身は花咲かぬ桜麻のをふの浦なみ六十越えめや

698 若浦
わかの浦の神に書きやる藻塩草心になびく手向ともがな

二三の作を挙げて、他の歌人たちの詠と比してみれば、家隆のあり方が明らかになるであろう。

657「あらち山」の詠で、他歌人たちは、多く、

新古今、冬　　人麿
やたののにあさぢ色づくあらち山峰のあは雪さむくぞあるらし

に依拠して、その厳冬の風情を

661　冬の夜の峯のあらしやあらち山雪よりかかる野辺の浅ぢふ　順徳院

666　夕ぐれは風のけしきもあらち山ふもとの山ののべもあは雪　兵衛内侍
　　ぞふる

などと詠じている。家隆一人、それに

古今・賀　業平

349　桜花散りかひくもれ老らくの来んといふなる道まがふがに

を、加味して嘆老の人事詠にしていることには注意せざるをえない。

また「玉河里」では

1093　日にみがき風にみがける光かなのどかにすめる玉河の里　順徳院

1103　あきらけき御代の光に久かたの月かげきよき玉河の里　行能

のように、治世を讃えるものの他に

1096　天の原雲の波間にみがき出でて月ぞやどれる玉河の里　家衡

1097　光さす里を尋ねてすむ月の影をみがける玉河の里　俊成卿女

のように、月と玉をとり合わせたものなどが主流を占めるに対して、家隆は、万葉歌（巻十四・3390）「玉川にさらす調布さらさらに何ぞこの児のここだかなしき」に依って、自己に与えられるはずの貴人（天皇・院）の恩寵がいまだ及んでいないことを嘆ずるのである。この題で範宗が

1102　時わかぬ身はいつとてもこの花の袖に露けき玉河の里

と、自身の憂き身であることを詠じていることにも目は及ぶのだが、一連の歌群の中で家隆歌は、依拠する詠が異なることもあり、異質なものとなっていると言えよう。

順序は戻ることになるが、このように考えて行けば「田蓑嶋」にも目を留めざるをえまい。（底本によれば、ここは「たづ」となっているのであるが、「新編　国歌大観」第四巻によって「たみ」でなければ、五句目「袖」と照応しないであろう）他歌人たちは、

古今集　雑上　よみ人しらず

913　難波潟潮みちくらしあま衣たみのの島にたづ鳴き渡る

918　雨によりたみのの島をけふ行けば名にはかくれぬものにぞ　貫之
　　ありける

に依存しつつ

650　難波潟たみのの島に鳴く鶴の霜を重ぬる長き夜の声　行意

652　あま衣田蓑の島にたづぞなく難波のあしのさやぐ霜夜に　家衡

と、「霜夜」と「鶴」をとり合せたり、

651　おきあかす霜ぞかさなる旅衣たみのの島は来てもかひなし　定家

657　旅人のはらふたもとも白妙の田蓑の島の雪の曙　知家

と、旅人の立場となった歌や、風景の中に旅人を登場させ、その労苦や冬景色を詠ずるものが多い。しかしながら、家隆の場

合は、やや事情を異にするのではなかろうか。この詠作も、他作の如く田蓑嶋の冬景色を詠んではいるが、その中で霜夜の苦を嘆ずるのは、「田蓑島の民」なのである。

「平家物語」巻六・紅葉の、高倉帝の歎きを想起すれば、民草を寒凍の苦の下に置くことは、天子の失徳・失政の故なのである。家隆にしてみれば「民」すなわち家隆自身であり、自己の日の当たらぬことを歌ったと言えるかもしれない。とはいえ、承久二(1220)年に、後鳥羽院を定家が激怒せしめた事件を思い合わせると、このような表現態度は、危険なものも招きかねないと言っても良いのではないか。家隆の「暗い思い」は、それほどに切迫したものであったのかもしれない。

これまでに説いて来たことに立脚すれば、一見した所では、叙景歌かと思わせる

冬　住吉浦

563　すみよしとあまもや言はぬ浦風に波あれくらす冬の苫屋は

交野

564　狩り行けば交野の霰きえぬまの玉の緒またぬ雉子鳴くなり

にも、すでに説いてきた家隆の心境の反映を見ることが出来るかもしれぬ。「住吉浦」では、

625　住吉の松の嵐やかかるらん夕波千島声まさるなり　順徳院

のように、初冬の住吉浦の状景を詠ずるのがほとんどなのだが、家隆は、古今歌

雑上　忠岑

917　すみよしとあまはいふとも長居すな人忘れ草生ふといふなり

にも立脚した上で、住吉の浦の冬の住み難さを述べていることになる。

後者の「交野」の詠も異色なのである。家隆の作は、これから鷹狩をする人々の手によって落命せざるをえない雉子が、その命のように、降ってはすぐ消える霰の中、(自己の命運を予期するがごとく)悲しく鳴く様を描いている。「鷹狩」の詠で雉子などの立場を詠むことは、

堀河百首　紀伊

1071　みかり人近くなり行く鈴の音を交野の雉子いかに聞くらん

金葉・冬　内大臣家越後

283　ことはりや交野の小野に鳴く雉子さこそは狩の人はつらけれ

を、先蹤としていると思われる。とはいえ、他の作が

639　狩人の交野のみ雪うち払ひとよのあかりにあはんとすらん　定家

640　狩りくれぬ今日も交野の草枕かれ葉の霜に引き結びつつ　家衡

のように、伊勢物語などをかすめつつ、鷹狩を、あくまで風雅のふるまいと捉えていることと比した時、その違いに驚かざるをえないのではなかろうか。

このようにこの二作をとらえた時、住吉の浦の冬をわび、交野の雉子に同情をよせることと、自己の不遇を訴えることには、共同の基盤となる心情があったであろうことを想像するのは許されるのではないか。

そして、「内大臣家百首」において、家隆が訴え続けた内容と、その原因となっている諸々の「暗い思い」と、これら「内裏名所百首」に内容されている訴えや思いに、大きな共通性のあることは、もはや説明の必要はないと考えるのである。

六

では、この家隆の「暗い思い」は、いつごろまでに、遡及することが出来るのであろうか。

「内大臣家百首」以前の述懐題をふくむ晴れの規模の大きい行事と言えば、建暦二(1212)年末の「五人百首」の五首が挙げられよう。

2695 たらちねの身を愁ひても年は経ぬ子を思ふ末も君の千代まで

2696 冴ゆる夜の袖の涙の色ながら春のあしたの空やながめん

2697 何事を思ひ知るとはなけれどもあればある世に身をまかせつつ

2698 いつなれて宿はと問はば答ふべき岩の狭間の谷の夕暮

2699 白真弓いそべの松のいつとなく波に濡るれど引く人もなし

彼はこの諸作の中で、自己の諸々の不遇や満たされていないものを訴えている。2695は子息の隆祐の、世に出ているとは、未だ言い難い状況は[15]、自己の無力によるとしながら、その救いを君主の恩寵を求めている。2696は「大和物語」第四段などを参考とすれば、緋の衣のままに、公卿たりえる春の除目（具体的には建保元(1213)年の春への期待ともいえようが）の訪れを待ち続ける嘆きを詠んでいるのであろう。2697は、時のみ空しく過ぎて行く、悟りを得られぬ身を歌い、2698は、出離への思いとそれを実行しえぬことを詠んでいる。2699は、常に涙に濡れるばかりで、自分を引き立ててくれる人のいない孤独の思いをこめている。

この悲しみの訴えは、冬部にも現れていて、

2229 長き夜を送りもやらぬかたしきの袖に数かくをしの声々

2230 詠めつつ年も移りぬいたづらに我身世にふる雪の光に

は、恋の歌かとも思われるのだが、自分としては「螢雪の功」を積みながらも、世の中に対しては無為と思わざるを得ぬままに老いる様を詠じている。

小さな歌会などを眺めると、承元二(1208)五月二十九日「住吉社歌合」で

寄山雑

2700 いたづらに年経ぬる身を鏡山くもらぬ御代にあはれとも見よ

と、詠作したころまで遡及できるかもしれない。特に留意したいのは、「五人百首」と同年の五月十一日に行われた、内裏詩歌合である。「水郷秋夕」題は、述懐歌ではないのだが、家隆は

春日山をどろの道も中絶えて身をうぢ橋の秋の夕暮

と詠んでいる。自己の家門の公卿への出世の道が父（兄雅隆とも考えうる）の代までで、中断しそうになっていることを嘆いているわけである。この詩歌合は、「元久詩歌合」を摸した、「(順徳)天皇主催の詩歌合の初度と見做されるものであ[16]」り、それに際して、非「述懐題」にこのような詠作を提出したことにこ

められた、家隆の意図する所は、小さくないと言わざるをえないのである。自己の心中の思いを何としても、新帝に知ってほしいとの願いの切なることを感じないわけにはいかない。

このような傾向の作は、以後も指摘するのに難しくはない。非「述懐題」でも、

建保元(1213)年九月十三日　内裏三首歌合

十三番右　暮山松

2676　高砂の尾上の松の夕時雨かくてふりゆく身をや尽くさん

二(1214)年二月三日　内裏詩歌合

野外霞

1740　夕かすみはらひもあへずうづもれぬ野中に立てる松の春風

同年八月十六日　秋十五首乱歌合

十三番左　秋月

2072　あくがれて宿をば出でぬこの里も我が衣手は月にぬれつつ

三(1215)年六月二日　四十五番歌合

三十四番左　暁時雨

67　あかつきや木の葉も色やまさるらん時雨も袖にしむ心ちして

同年六月十八日　六題歌合

江上霞

1745　なにはえのかすみにしづむ身をつくし春のしるしや見えでくちなん

夜帰雁

1747　春をへて列乱れ行くかりがねの我身ひとつにくもる月かげ

の諸作などを挙げることが出来る。

また、前記した建保二年八月十六日秋十五首乱歌合には、「秋懐」の題があり、ここで、

六十七番

2701　いづくにか身をば宿さん雁の来る峯にも晴れぬ思ひあるころ

と、詠じていることも指摘しておきたい。

非「述懐題」に自己の思いを託するのは、この機会を生かして、何としても主催者に自己の心を訴えかけようとする心情のためと思われるのだが、一連の和歌行事の家隆の和歌作品の傾向から、数年にわたり順徳院に、何としても自己の思いを知ってもらい、かつ、その実現を切実に願っていた事は容易に想像できよう。

しかし、それが実現する時期は、建保四(1216)年正月五日の叙従三位まで訪れなかったのである。その間の苦しみ辛さの集積が、「内裏名所百首」に、あのように、苛烈な形で顕現したと考えるのである。すなわち、二つの百首は、共通の基盤より生れた作品と考えたいのである。

七

稿をひとまず終えるに当って、今回扱った二つの百首にやや遅れて催された、建保四年「後鳥羽院百首」における、これまで述べて来た傾向について、大まかに眺めておきたい。

結論から述べれば、この傾向は完全とは言えないが、大むね払拭されてしまう。かつ、それとは逆の、喜びの歌が目につく

のである。

820 春部末尾の
老いが世の我が身の花の名残まで今年はいたく惜しき春かな

は、ややわかりにくいかもしれないが「新編　国歌大観本」の端作に「建保四年、于時宮内卿従三位正月五日叙之」とあることを参考にすれば、これは惜春の歌ではあるが、喜びの春、すなわち従三位に叙せられた老年の春の過ぎるのを惜しむ歌となろう。

また雑部巻軸近くの五首にも注意すべきであろう。

896 たらちねのあとや昔にあれなましおどろの道の春にあはずは

897 和歌の浦の波の埋木いく代経て君のめぐみの春をしるらん

898 風の声波もおさまる君が代に会ひても春の月を見るかな

899 永き日の去年の御法の始めより伸びける千代は君ぞかぞへん

900 万世を照らすもうるふ天地に民も数そふ御代の国々

896では、「おどろの道（＝公卿）」に任ぜられ父と同じ道を歩むことができた喜びを、（897では、歌人として息・隆祐が再度、院の恵みを受ける事を切望しているか）898では、896の喜びと院の治世への讃美を詠じている。899は建保三（1215）年五月二十四日より後鳥羽院主催で高陽院において行われた二十一日間の逆修を素材として、院の治世の永きを寿ぎ、900は、万年も続く御代に、国々の民の人口も増え、栄えることを歌っている。このように、院の御代を無条件で賛える姿は、「内大臣家百首・内裏名所百首」にもなかった訳ではないが[17]、後鳥羽院百首は、その傾向が極めて強くなっていると思わざるを得ない。それに比して、自分を嘆く姿はかなり弱まってしまうのである。

注

1 家隆の和歌に関しては、久保田淳氏「藤原家隆集とその研究」昭和四十三年刊による。定家の和歌に関しては、久保田淳氏「訳注藤原定家全歌集」昭和六十一年刊による。その他の和歌は「新編　国歌大観」によった。
なお、一部「新編　国歌大観」に拠り、本文を、また私意で表記を改めた所がある。

2 「就実語文」第10号　昭和五十七年

3 このように氏は説くが、本歌と思われる　古今・離別
368 小野千古が陸奥国の介にてまかりける時に母のよめる
たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりは関な止めそ
から考えると、親の庇護が（その死により）永遠に失なわれたことを悲しみ、と、同時に憂世から出離もしがたい自分の官位への執着の念を詠んだものと考えたい。

4 「新古今歌人の研究」昭和四十八年刊、第三篇、第二章　P882

5 「藤原家隆集とその研究」P488

6 「玉吟集」2798～2817

7 「拾遺愚草」2664～2673

8 「訳注　藤原定家全歌集」上巻P168にすでに頭注として挙げられている。

9 同前。上巻P183。

10 注(5)に同じ。

11 建暦二年七月十七日条「仰云『……資実卿廿三日可入熊野精屋、仍以件日可有作文和歌等、古来公卿必列両座、両興（息イ）又可詠和歌』、予

申云『詩極雖不堪、先例不候歟。勿論為家歌未連三十一文字者候、以学（受イ）歌出仕、太不便候』猶御不許。二十日条「……取歌題見之、又可示雅経朝臣由有仰」

二十三日条「……『御歌見無難』申其由」

12 「藤原家隆」（『和歌文学講座』7「中世・近世の歌人」）昭和五十七年刊による。また、久保田氏注(4)前掲書第三扁・第一章にも、家系について詳細な言及がある。P484～488

13 存疑ながら、一応このように考えた。ただし、藤原公能女忻子（後白河中宮）の可能性もある。

14 『後白河院』古代学協会　平成五年刊所収「後白河院後宮」P102～103による。

15 久保田淳氏「藤原隆祐について」『中世文学』第10号　昭和四十年による。

16 「藤原家隆歌集とその研究」P487による。

17 以下に例として

内大臣家百首　祝　日

687 雲の上をのどかに照らす千早ふる神代の日かげなほかぎりなり

内裏名所百首　雑　鳥羽

787 八百万鳥羽田の稲をかけつみて道ある里の民ぞ栄うる

を、各一首ずつ示しておく。

（山形大学助教授）